メヒテルト・マリア

星の輝き・その生きざま

九十年の生涯

メヒテルト・マリア・カルシュ

若松　秀俊

内容

まえがき……○四
誕生まで……○六
初めてのドイツ……○九
旅の途中……一四
成長期……一六
動物と一緒……一九
出会い……二〇
旧知の紹介……二二
子供の教育……二四
官舎の暮し……二六
建て替え……二八
幼な馴染……二九
死者への祈り……三六
子供の祭……三七

軽井沢……三九
高校生とともに……四一
ドイツでの生活……四二
再び日本へ……四五
戦争前後……四八
父母との別れ……四九
夫ヘルベルト……五〇
日本との絆……五三
米国の家族……五六
父の跡を……五七
あとがき……五八
付　録……五九
参考文献……六〇
追悼文……六一

まえがき

メヒテルトが雲間から顔を出した。大きな顔であった。メヒテルトが亡くなった。平成三十年八月十五日、終戦記念日のことであった。この日は、彼女から許可を得ていた写真の贈与について午前中に関係者との話し合いを行った日であった。笑顔が美しかった。若き日の彼女の笑顔の写真が手元にある。なかなかの美形である。電話でいつか、ふとそれを話した。すると、何の屈託もなく、「それよりも、今の私のほうが澄んだ綺麗な気持ちのひとりの女ですよ。それこそ、秀俊さんには是非伝えたいことなのですよ」と、若干、不自由になった途切れた日本語で筆者に返したものだった。彼女の日本語は電話での会話を一部録音してある。「まだ、死ぬ気にはならないが、ほとんどやり残すことのない私の人生でした。父とは生きるすべてにわたって語りあっていたので、何の悔いもありません。それはとても面白い人生でした」

「あなたと最初に電話で話した時、何の抵抗も戸惑いもなかったし、海を挟んでいる距離感が全くもってありませんでした」

「貴方と父はどこかでつながっている」とその後も繰り返し語っていた。

父や旧生徒そして縁者が残してくれた数々の写真や絵画には、思い出深いものがあるという。

その日、彼女の命日には、銀座での絵画展で友人らの催した会に招待されていた。絵画を鑑賞中に、メヒテルトの少女時代の絵姿をなぜかふと思い出した。

帰宅してから、胸騒ぎを覚えて、ネットで何の気なしにセイント・ゴアールを検索すると彼女の訃報を目にした。Passed away の文字が目に飛び込んだ。

亡くなったのだ。いつかはと、覚悟はしていたが、ここに至って悼むこころは筆者には大き過ぎた。

テネシー州のチャタヌーガの丘に沿って建つ清楚な自宅と愛猫を抱く彼女の笑顔を思い出す。

これまで、カルシュのことに紛れて書けなかったが、彼女の数奇な人生を何とか綴ってみたいと思ってはいた。でも、なかなかその機会がなかった。しかし、今に至って、筆者の思い出に沿って、拙いながらも概要を綴ってみようと決心した。

戦中戦後の混乱の時期にあって、一九四〇年から一年ほどのドイツ学園に通った経験があるだけで、たった一度も公的正式な学歴もなく、幼稚園、小学校、ギムナジウムの様子をすこしも体験せずに、大学、そして正式な研究者への何の訓練も受けたことのなかった彼女がシュタイナーの研究で戦後に大きな業績を上げたことは、英米系の人々に広く知られていることである。

誕生まで

本書に登場する女性は通称マリアとよばれる。メヒテルトが本名であり、どちらも宗教ゆかりの名前である。父はドイツ人のフリッツ、母はユダヤ人のエッメラである。父母はマールブルクで出会い一九二一年に結婚した。その後、日本の文部省の外国人教師の募集に応じて来日して、奥谷の官舎を住み家とした。一畑薬師へのカルシュ夫妻の参詣の写真がある。これには一九二七（昭和二）年六月十九日の記述がなされている。

この時期の参詣は、メヒテルト誕生に関連する諸事からみて重要な「マリア」の人生の第一歩であった。というのは、これ以前に母エッメラがマリア誕生の二年ほど前に神戸在住のドイツ人ヘルテル医師の診断を受けて、左卵巣腫瘍摘出を行った。その後懐妊し、良好な経過を蔵光産婦人科医師のもとで確信しながら、一九二七年十一月五日にも再度ヘルテルを訪ねていたとのことである。メヒテルト自身宛てに、二〇〇七年三月十九日に、筆者からの諸々の質問の電話の中でたまたま聞いたことであった。メヒテルトは仮

1927 年 6 月 19 日　一畑薬師

死状態で生まれ、蔵光医師による温湯の刺激によって呼吸開始、蘇生のことであった。

このことは、メヒテルトが後に、母エッメラから直接聞いたことであり、それをまた、筆者がメヒテルトから前述のように直接に聞いたことである。これについては、拙著「四ツ手網の記憶」のなかに、一部を記述した。

夫妻のカトリック信仰の心とは別に、異境にあってのカルシュ夫妻の宗教心に対する心持ちの寛容さが自然な行動に連なったとは思うが、子供の欲しかった夫婦の切なる願いが友人であり、同僚の多田英語教師の勧めもあって、宗旨は異なってもここ一畑薬師の訪問と祈願を決意させたという。

そして、メヒテルトは松江の奥谷町で一九二八（昭和三）年一月二十七日に二人の間の長女として出生した。当事者であるメヒテルトがこのようなことを筆者に向かって、にこやかに語ってくれた。

それから四十年後の一九六八年に、彼女は蔵光医師と再会し、松江駅で彼の見送りを受けたとのことである。

ところで、一畑薬師にお参りを済ませた夫妻が休みをとり、お茶を楽しんだ店があった。そこであらためて、霊験を多田夫人と願ったとの話があったという。しかし、もとはといえば、日本風のたたずまいが好きで、お茶を良くたしなみ、日本の調度を集め、和服をこよな

く愛した多田夫妻らの提案からのお参りであったろうが……。

出生前の一九二七年から、周囲の人から大きな祝福を受けていたが、その時の周囲の人々の期待にあふれた贈物を飾ったクリスマスを迎えることができた。この時期に、子を待ち望むエッメラの写真が解説つきで何枚も残っている。一九二八年になって待望の女の子のメヒテルトが生まれた。生まれると。星の輝きを願って日本名として星子（ほしこ）と名付けられた。ここから、彼女の人生が始まった。

1927年 クリスマス　官舎の一室

無邪気なメヒテルトが膝の上に載る。エッメラにとっても静かな幸せであった。

でも、この子を連れて、ドイツに帰りたい。両親にもこの子を抱かせてあげたい。

何度もそう思った。日本に住んで、もう三年も過ぎた。メヒテルトが母親をみて無心に微笑んだ。子育てにあっては、ときどき熱を出すのが心配であった。それゆえ、機会をみて、その診察をドイツでも行って貰うつもりであった。

メヒテルト誕生後の
最初のクリスマス 1928 年

奥谷町官舎の前で両親とともに

初めてのドイツ

一九三一年の春、三歳のメヒテルトが夫妻の一時帰国に合わせてドイツに行くことになった。神戸からヘルクーゼン号での船旅であった。五月初めに、ジェノヴァに到着した。ここから陸路ミラノを経由して、アルプス越えで故国に入った。初めてみるヨーロッパに感激した。

ドイツの親類の家を次々と訪問した。どこに行っても歓迎された。エッメラの両親や兄弟

姉妹とも会った。祖父のゴットフリートはプロテスタントの牧師である。カッセルからゴーデスベルクを経てボーデン湖畔のリンダウに転居していた。

大きな家だ。

「ドイツの家はみんな大きいな」

メヒテルトが感心した。

「ハイハイ」

「うんうん」

といいながら、祖母ベルタは初めて会った孫のメヒテルトの言うことは何でも聞いてくれる。そして丁寧に教えてくれる。

「ムティ（おかあさん）とはちがうな」

母の顔と見比べて、父の様子を仰ぎ伺った。ブランコのある公園は広くて綺麗であった。筆者も場所は違うがボーデン湖北岸という好位置で、バケーションとレジャーに適した温

メアースブルグ，ボーデン湖の畔の街　1931 年 9 月

暖な気候と美しい環境が整っていたフリードリクスハーフェンを留学初期に訪れたことがある。そして『四ツ手網の記憶』でも述べたように、この地は、ツェッペリン飛行船で有名な町であった。が、筆者にとっても遠い昔のことになる、一九七四年九月の思い出がある。

ここボーデン湖畔のエッメラの両親の別荘には、エッメラの弟妹が待っていた。ここで、数日過ごし、そこから、ボートに乗って、春風を楽しみ、その後に、叔母たちと一緒に街に出た。この間、エッメラの生まれ故郷のベッツドルフを訪ねた。その翌日は、先祖との対話を求めて、母方の墓を訪ねた。

ここがムティのお爺ちゃんが眠っているところよ

「ファティ（おとうさん）も初めてよ」

ここで、両親の結婚間近の様子を語る上でも大事な一枚のデッサンに触れよう。一九一九年十月十八日にフリッツとエッメラがマールブルクの新市街地

エンメラ、メヒテルト、テオドール、ゴットフリート

メヒテルトの曾祖父 ヨハン-ハインリッヒ・アクセンフェルトの墓　（ゴーデスブルク）

リンダウの地を訪れていた。

このとき、ルイーゼがフリッツの昼寝の姿を描いたのである。そして、一九二〇年十二月二十八日にエッメラがフリッツ・カルシュと、また妹のルイーゼがフリッツ・ヘッテと時と場所を同じくして姉妹が揃って結婚式を挙げた。

因みに、一九三九年五月二十一日にこのデッサンがルイーゼからカルシュに贈られたとのメヒテルトの証言がある。

楽しい日々を後に、列車に乗ってドレスデンに向かった。日本とは

フリッツ・カルシュの
ルイーゼによるデッサン

ボーデン湖の遊覧船上で

前列左から ベルタ H. メヒテルト、
ゴットフリート 後列左よりエッメラ、
エディット、テオドール

の小さい山であるフラウエンベルクで婚約したという。

そんなフリーデルンの話がある。翌年一月三日にエンメラがフリッツを両親に紹介する意図があって、

船内レストランにて

異なる背丈の低い中央駅のホームに迎えに出て、手を振っている女の人が見えた。ここまで、祖母がわざわざ迎えに出て来てくれたのだった。こんなにも近くに見てで、フリッツの母のルイーゼにメヒテルトは初めて出会ったのだ。強く抱きしめてくれた。

父の言っていた通り、ドレスデンは眼の覚めるような美しいまるで美術館のような街並みであった。フリッツの生家を人づてに譲り渡したあとは、ブラゼヴィッツの小さなアパートで一人暮らしをしていたおばあちゃんだ。なんとやさしいおばあちゃんだろう。

それから親類が牧師をしているポーランドを訪問した。ひどい言動を発しているナチスの将校を目にした。その頃はナチスのことをメヒテルトはもちろんのこと、フリッツも何も知らなかったようだ。

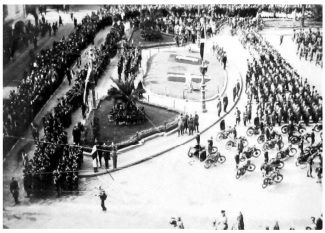
エッメラの親類とともに　カルシュ一家

旅の途中

ドイツ滞在の稀有な体験を父の残した写真をもとに筆者に丁寧に語ってくれた。もちろん、後になって両親に説明をしてもらったことではあろうが、親の説明のまた聞きと筆者の調査による昭和六年時についての話である。訪問した都市は、メアースブルグ、ザルツヴェーデル、オーバーギュンツブルグに続いて、バイエルン情景を映すライヒホルツの草原、エヴァースバッハの松林などであった。アンドリアン男爵と一緒の写真、フリーデルとルイーゼ・ニコデムとはともにアドモントにて撮影。そして、再びリンダウに戻っての生活であった。やがて日本への帰国の時が近づいてきた。

帰りはイタリア経由の船でザールブリュッケン号であった。船上はとても楽しく素晴らしかったし、知り合ったミアーズの家族とは親しく付き合った。イタリアの政情を映すファシストの様子やストロンボリの有名な火山を眺めながら地中海を抜け、イギリスの資本で造られたスエズ運河に差しかかった。通過時にはイギリス船フルダの姿が映像として収められている。

義弟フリッツ・ヒッペと 3 人の子供　エルンスト、ローレ、トラウデ（ザルツヴェ-デル）



1931 年 10 月 11 日　コモにおける
ファシストの日 講演者を待つ群衆

運河を通過した後に、インドの西岸を南下して、セイロン（現在のスリランカ）に上陸した。そこで気性の穏やかな象を初めて見た。現地の少年が象の世話をしていた。シンガポールではミアーズ家の男の子と一緒に猿に餌を与えたことがあった。マレーでは漁民の様相や珍しい水上の高床式の村落を目にしたとのことである。筆者も四十年ほど前にタイで見た風景そのものを思い浮かべることができた。そして、一行は長い船旅を終えて神戸の港を目指した。

神戸からは列車で懐かしい松江に向かうことがで

1931 年 10 月 20 日、スエズ運河、イギリスの蒸気船フルダとの遭遇

1931 年 10 月 20 日、スエズ運河、左はイギリスの蒸気船

セイロンキャンディへの通り

猿への給餌　シンガポール

きた。そして、いつもの我が家でのエッメラのピアノ演奏と帰りを待っていた「お母さん」の君枝の手料理であった。

成長期

日本の母と終生呼んでいた錦織（川上）君枝はメヒテルトの人生航路のなかにあって、極めて重要な女性であった。彼女の子守の様子は《おんぶ》でわかるが、これは極めて日本的な子育てであったようだ。最初はエッメラが、経験のない《おんぶ》での子守を心配していたようだが、メヒテルトにとっては、齢を重ねて長じても決して忘れられないことである。それは、何といっても独特の感触であった背中のぬくもりであったという。

マレーの水上村　カランブール、

錦織君枝の背におんぶの
メヒテルト

筆者は君枝の娘を探し出した。そして電話で話したことがあったが、メヒテルトのことを聞き出すことは、残念ながらほとんどできなかった。それもそのはず、母君枝からはメヒテルトのことを話題として提供されたことがほとんどなかったとのことである。

メヒテルトは幼少の頃には、どこへ行くのも彼女と一緒で、神社では宮司さんと、そして寺院では住職さんと共に仲良しになれた。後年、松江を再訪問した際のエピソードが『湖畔の夕映え』に載せてある。

みそ汁はよく昼食に摂った。そのために、豆腐やこんにゃくを買いに君枝と一緒にでかけた。それに、現在パン屋になった石橋の桑原で餅を買ったことも覚えている。麻の実は何のためであったかわからないが買い物の記憶が残っている。いなり寿司はメヒテルトの好物であった。

「日本の母」の君枝におんぶの
メヒテルト

大山にて 君枝と一緒のメヒテルト

夏にはときに、父フリッツにとって、大きな意味をもつ大山を訪れた。この大山は父にとっては因縁の地であり、その出会いは若き日の夢の中であった。大山の雄姿を初めてみた瞬間に、フリッツの背筋に戦慄が走ったという。二〇一六（平成二十七）年にそのときの感動を「大山の開山一三〇〇年記念」で地元の人々に伝えることができた。「大山王国」の石村隆男理事長の尽力があっての実現であった。今はすっかり様相の変わった博労座の様子などが写真で窺うことができる。大山の宿泊場所の宿坊の仏像は珍しかったが、うす暗い中で、すこし怖かったのを幼なかったメヒテルトは記憶している。

博労座から望む大山の様子

動物と一緒

とにかく、犬と猫が大好きだった。ビリィ、フレッキー、ポチはお気に入りの犬であった。メヒテルトより八歳年長の渡部紀代子が当時をよく見ていた。避暑のために、軽井沢に出かける直前の愛犬の事故は不幸なことであった。この様子は以前に拙著で語ったことがある。エッメラがとてもかわいがっていた犬であった。

金魚の池と藤の花が思い出にある。藤の簪（かんざし）をフリッツが髪に刺してくれた。

竹内（渡部）紀代子と一緒

官舎の庭の 金魚の池

菊の咲く官舎の庭
ポチとビリィ

金魚の池は、石を運んだ父が丹精込めてセメントで固めてくれた。後年、妹のフリーデルンと一緒にこの庭で遊んだことが思い出される。鮒とメダカは、今は暗渠になっている奥谷川で掬ってきた。でも、金魚は学生が訪問時にプレゼントとして持参したものであった。

出会い

一九九九（平成十一）年の九月五日朝の出来事がすべての始まりであった。おそらく、このことがなかったなら、カルシュ博士のことはもちろんメヒテルトのことも人知れず、自然消滅していたであろうと、当時の高齢の関係者の誰もが口を揃えて筆者に語っていた。

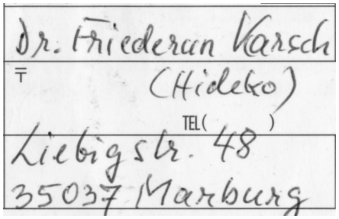
シュトウットガルトの小さなホテルでの出来事がそうであった。フリーデンス・プラッツ（広場）に面したホテル・アム・フリーデンスプラッツで筆者がフリーデルンと偶然に出会ったことがそうである。

その日、朝七時頃であっただろうか、階下のダイニングルームで朝食を摂っていた。すると、上品な婦人が筆者の左斜め向かいのコーナに壁を背にして座った。彼女が食事を始めたとき、この日の予定について、我々は仲間同士で、もちろんのこと日本語で語り合っていた。彼女がふと筆者の方をみて微笑んだ。気づいてそのわけを尋ねると、大部分は忘れた日本語

の響きをとても懐かしく感じて、自然にそうなったとのことであった。

彼女は宗教の街のマールブルクに在住の地理学と政治学を専門とするフリーデルン・クリスタ・カルシュ博士であることがわかった。彼女は松江、横浜、東京、軽井沢での懐かしいかつての暮らしをかみしめるように語ってくれた。話題は父フリッツが一九二五（大正十四）年から一九三九（昭和十四）年まで旧制松江高等学校で教鞭を執っていたことへと順に進展していった。しかし、残念ながら筆者らの出発の時間も迫り、再会を期して一緒に写真を取り、住所を伺って別れた。

1999 年 9 月 5 日
シュトゥットガルトのホテルで撮影
フリーデルンと筆者



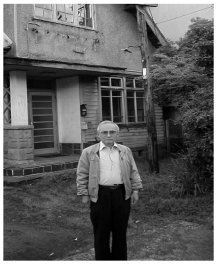
フリーデルンの住所が書かれた紙片

フリーデルンとの別れ際に、筆者の名刺を急ぎ手渡した。彼女には名刺の持ち合わせがなく旅行案内書についていた葉書に自分の住所を急ぎ書きつけた。ついでに、そこに彼女の日本名の〈ひでこ〉を記した。この一片の書き付けが実に、調査の総ての出発点そ

のものであった。これ以外にカルシュ博士を知るすべは全くなかった。フリーデルンから手にした紙片に、住所と一緒にメモされた彼女の日本名が、私の名前の〈ひで・とし〉と同じであった。あとで気がついたこととはいえ、出会いには偶然が幾重にも重なっていた。帰国後、約束の写真をフリーデルンに送ったところ、返事にカルシュ博士の履歴と業績の概略が届いた。戦中、戦後の混乱時に紛れて彼の業績が散逸し、日本では十分に時間がとれず、その後、ドイツに戻る機会があっても、なおまとめるに十分ではなかったことが、その文面から推測された。しかしながら、この時点では、カルシュ博士が、どのようなひとであるか、また生徒との関わり合いも全くわからず、推測の域をでることはなかった。

旧知の紹介

フリーデルンの話に興味をもった筆者は、松江市役所と島根県庁、島根大学に問い合わせたが、カルシュ博士に関する具体的情報は全くと言っていいほど得られず、筆者も多忙で、彼女とはクリスマスカードを交換しただけであった。ただ、関連する史実と人名の確認を細々と行っていた。年が改まり自らの周



竹原敏夫 2000 年 4 月 28 日
修繕前の官舎の前で

辺に種々の事情が生じたこともあって、その後も十分に時間がとれなかった。それでも、フランスのトゥールーズで開催された遠隔医療国際会議に参加・発表後に、時間をみてドイツに立ち寄り、会おうとしたが、結局、時間がとれずこれも断念した。帰国後の四月にやっとこの件に本格的に取りかかることができた次第であった。その後、フリーデルンから紹介された長女のメヒテルトに電話と手紙で接することができた。これから得られた情報をもとにして、かつてのカルシュ博士の生徒と縁者の何人かに接触を試みた。まず、電話で接触できた増田の紹介で松江在住の竹原との出会いを試みた。これが、調査に大きな力添えを提供してくれる旧生徒との接触できる太いパイプになった。これを手掛かりに、先述の増田と博多で会い、同級の澤田を訪ねることができた。さらに、芦屋での白石の口利きで奥野、松本らと面会し、そして東京で細田や岡崎と会うことができた。そして同窓会の会長の中村にも会うことができた。

2001 年 2 月 9 日 芦屋駅での会合
左より奥野 松本 宮田 白石

子供の教育

ところで同博士は長女の彼女をMechtild（メヒティルト）とよび、幼な友達はメヒテちゃんと呼んでいたという。しかし英語圏ではchの発音が困難なので、成人してからは渡航したアメリカで、ミドルネームのマリアで終生呼ばれていた。

エッメラにとって、悩みや不安があった家事や育児のことでは、近所が協力してくれた。しかし、一人で過ごすエッメラにとっては、日常的に不安が絶えなかった。

1934年頃，後列：橋本チヨ子、エッメラ、フリッツ、 前列：中村トキエ、メヒテルト

後のことになるが、家庭内の教育では、中村（石飛）フデ子がメヒテルトの日本語教育に協力してくれた。やや手こずったと、カルシュ再来の日々にメヒテルトを前にして自らが語っていた。

隣の英語講師のウッドマンの一家では、母親が日本人だったからだろうか、子供が北堀の小学校に通っていた。それをみて　「わたしも学校へいきたいわ」と両親にお願いしたことがあった。

学校にメヒテルトを敢えて、両親が行かせなかったのは、娘を通してシュタイナーの理論の実践を自らの手で行いたかったのか？それともドイツ人としての教育を護りたかったからなのか？ 今となってはその理由がよくわからないが、メヒテルトはそう語っている。

もちろん、彼女は折に触れて認識の方法や行動原理などの教育を父から丁寧にシュタイナーの理論に従って受けた。そのことは後で分かったことだが、筆者にも語っている。

娘を散歩に連れて行くのが、父に暇があるときの行動であった。そこで、例え話をしながら、シュタイナーの理論をかみ砕いて教えてくれた。これが最も大きな教育であった。家庭内ではエッメラにも質問を投げかけてはよく語りあった。

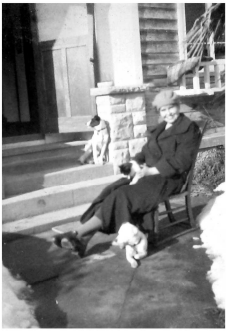
メヒテルトは両親が人智学を信奉していることを知る由がなかった。ただ、父の散歩に手をひかれて出掛けると人の世の有様と成長過程を例をあげて丁寧に聞かされたということであった。

このように終生、カルシュが一人の徒として自らを見做して、シュタイナーの思想を実践してきたことと娘のメヒテルトとの関わり合いが、彼女の妹のフリーデルンとの間の役割の自然な関わりの継承に成長していったことを感謝の心をもって、満ち足りた思いで筆者にもいつしか微笑みをもって、自然に語り継ぐことになった。

官舎の暮し

庭の手入れは念入りに母のエッメラが行っていた。それにも増して着任早々から犬を貰い受け、可愛がっていた。このことが、メヒテルトに及ぼした影響は大きかった。近所との付き合いも頻繁に行っていた。でも、言葉はエッメラにとって大きな障壁であった。メヒテルトが九歳のときまでは、隣同士の付き合いもよくあった。しかし、火事に遭遇してから、ほとんど家族同士の交流が絶えていたという。米国籍のハロルド・ジョンソン・ウッドマンは一九三二（昭和七）年から一九四二年まで英語の教師として旧制松江高校で同僚として在職した。彼の夫人は日本人で、二人

戦前の奥谷官舎の外観



1926年12月愛犬と
戯れるエッメラ

官舎のダイニングルーム

の娘がいた。長女は 大妹のエレーナとはアとのことである。英語のあったという。その後も後のあるときに大きなが届いた。その時からはた。モニカは太っ腹で豪快であったことは『湖畔の夕映えで』若干述べてある。

エレーナは周りの子供から特別に扱われていたようだ。

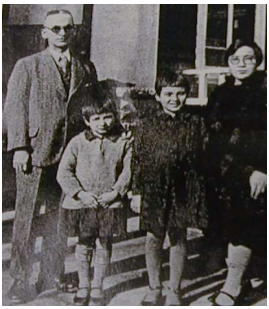
「子どもの時の友情は続かないものね！」

メヒテルトが悲しげな様相で筆者に語ってくれた。

全く連絡が途絶えても恋しく思っていた。

「元気なら、二人に会いたいものです」

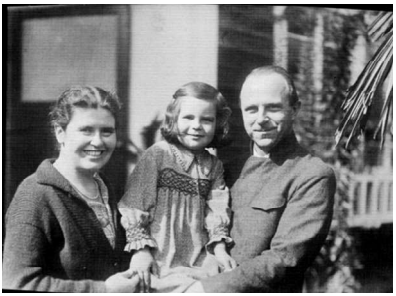
微かな震えが見えた。



ウッドソン夫妻と
モニカエレーナ姉妹

柄なモニカであった。

メリカで実際に会ったことがあるイントネーションが日本人特有で文通があったが、エレーナが離婚文字で書いた意味不明の妙な手紙音信不通になったとのことであっ



奥谷町官舎の前で撮影

建て替え

裏手の紀代子の住む渡部家の建て替えが行われた。

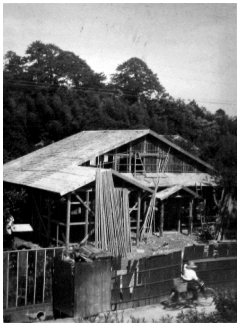
「どうして壊してしまうの？」

メヒテルトにとっては不思議なことであった。

フリッツは学校が済むと昨日とどう変わったかをみるのが常であった。この様子を詳しく描写している。メヒテルトは父フリッツの丁寧な説明を詳しく聞いている。でも、彼には本当のところ建築についてはさっぱり見当つかなかったようであった。この時の様子を、信子の母紀代子はよく覚えているとのことであった。

土台石の土木工事

作業の合間の休息時



渡部家の家屋棟上げ後の撮影

フリッツ、メヒテルト、エレーナ
近所を一緒に散歩

幼な馴染

アメリカの自宅でメヒテルトの描いた地図を使って、筆者に丁寧に自分の知っていることを示してくれた。近くに住む「仲良し」が日本人形を抱えて遊びにメヒテルトを訪ねて行くと家には、青い目の珍しい人形がたくさんあって、並べてお人形さん遊びであった。楽しかった。眼をうるませて彼女が思い出を語る。

日本語の勉強のきらいな彼女も、このときばかりは日本語が達者で得意であった。そうはいっても小学校までのつき合いで、メヒテルト十一歳ごろまでのことであった。

後で知ったことだが年下の東史も成人すると松江を離れていった。

「ままごとしましょう」

「お団子を作りましょう」

「わたしもするわ」

「いけません。服がよごれます」

モニカ　ウサギ小屋の前で

「お母さんは、何を言っているの？」
「おかあさんが、いけないって」
彼女はしたくてウズウズしているが、《洋服が汚れる》といって、させてもらえなかった。
「じゃ、あたしがするわ」
最も大切な泥コネは、もっぱら史の役目であった。
「お父さんはいつもニコニコした方でしたが、お母さんが厳しくしつけていたんですね」
一九六八（昭和四十三）年に再会したときに、メヒテルトが史から聞いた。
「幼心にも感じたドイツ人気質だったわ」
史が当時の印象を思い出して言いかけた。
「どういうこと？」
今度はメヒテルトが理解ができずに史に尋ねた。そんな昔話をメヒテルトがしてくれた。

後列左から永田フミ子、高橋トシ子、メヒテルト
前列左から高畠キミ子、小豆沢 史（1937 年頃）

二人は、ながくクリスマスカードのやり取りを続けていた。ホテルでのひとときに、ＮＨＫ

松江放送局のインタビューに一緒に参加した日本語の家庭教師の中村フデ子、日本の母の錦織君枝それに持田村の出身であった住込みメイドの中村（大笹）トキエらは

「再びお会いできたのは夢のようです。先生は心温かい方でした」

と目をうるませていた。

「仲良し」の少女たちが掴まえようとして追いかけたメダカやホタルは、いまでは、ほとんど見られない。けれども、朽ちかけていた官舎の姿が、このあたり一帯の変わらぬ閑静な雰囲気をとどめていた。

高橋トシ子と共に

エレーナやメヒテルトは別世界の人であった。松本昭少年が学校で見た、エレーナの弁当にはきれいな卵焼きが載っていた。それを羨ましく思っていた。

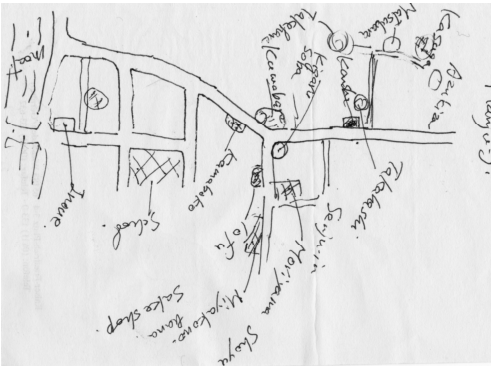
カルシュが近所を散歩するのを斜向に住む竹内（渡部）紀代子がよく見かけたものであった。それと一緒に、この周囲の様子を良く記憶している。長い間、埼玉県所沢に住んでいたが、今は老人ホームで暮らしているという。メヒテルトは彼女より八歳年下である。二〇〇二（平成十四）年の暮れに、彼女の娘の伊東信子が友人から紹介された。彼女は祖父渡部愛

之助の家に中学生まで住んでいたという。一九二〇（大正九）年生まれの紀代子はフリーデルンの乗った乳母車を押していたメヒテルトを路上で何度も目撃したという。そして、十七歳頃あの火事をも目撃している。確かに火事見舞いの新聞記事には父の渡部愛之助の名が見られる。

蜜柑 158 個を庭で収穫

隣人の桑田武一郎もその昔、自分の家の前で皆が遊んでいるのを見て感じたことを筆者に話してくれた。火事のことはよく覚えていたし、紀代子の弟の渡部直とともに、火事場の荷物運びの当事者でもあった。彼の母とメヒテルトの交流は戦後のことであろうが、当時の手紙を筆者に紹介してくれた。

仲良しの家をメヒテルトが教えてくれた。



記憶を元にしたメヒテルト自筆の近所の様子
（アメリカでの自宅でのスケッチ）

それこそ当時をつぶさに記憶していた。筆者のアメリカ訪問中に目の前でいろいろと描いて、筆者にそのメモを地図とともに直接に手渡してくれた。これについてはすでに述べた。

とにかく、春日神社や千住院は子どもの遊び場であり、宮司や和尚とは仲良しであった。和尚さんとの遊びは再訪日の時のエピソードが『湖畔の夕映え』に語られている。

石橋には豆腐屋の思い出がある。ここには、メダカや鮒の泳ぐ川があったとのこと、今も奥谷に住む竹原の言葉がある。そこで、ずぶぬれになって遊んだ。遊び過ぎて帰宅が遅れて、母親にしたたか叱られたことを彼女は思い出した。

福山に住む中林佳子は幼友達であった。年齢が同じで、石けりや縄跳びなどの遊び仲間であった。しかし、自分より年下の小豆沢史は最も印象に残る妹のような存在であった。史は春日神社のすぐ近くに住む最も親しい遊び相手であったからである。

メヒテルトとエレーナ

エレーナ -ウッドマン

奥谷の寺院の墓地

千手院のしだれ桜

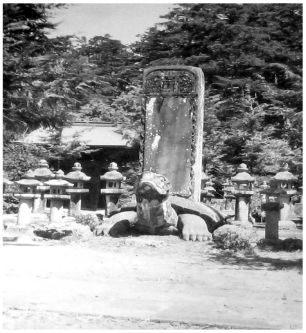
神社の近くはカラスが飛び回っていた。近所の子供とカラスの交流については松本昭の思い出を基に拙著『湖畔の夕映え』で語った。ここから近所の千手院に行くための階段には、弘法大師(Budist Saint)の像があった。千手院は格好の遊び場で、カラスは気味悪かったが、親しい友達でもあった。

エピソードと言えば、石橋から千手院に行く途中の森山醤油屋である。当時、大きな土蔵の脇の変圧器がうなり声（振動）をあげていたのを記憶している。醤油を天皇家に毎年献上していた老舗で、そこの現在の女将がザールブリュッケン出身のエミ（Emi）で、ここの店主と結婚した。後年知り合いになったこの人の娘がメヒテルトより二〇歳ほど年下である。その件を二人で語ったことがあった.が、もちろんその当時のことを知っているわけではなかった。この二人は長くクリスマスカードの交換を続けた。

変圧器のうなり声を聞いて「気もち悪いね」といいながら、幼馴染とその脇を通ったこと

を筆者に語ってくれた。また、怖がっていた狛犬にのっては、いろいろと友と寺院の庭でいたずらしていた。近所に出入りの人がよくこれを目撃したという。今もメヒテルトの印象に残っているのは、「しだれ桜」の美しさである。ここは遊び場としては最高の場所であった。それに、そんなに頻繁に経験した訪問ではなかったが、メヒテルトは松平の御殿様の霊廟を見て「重いものを背負った亀がかわいそうだね」とやさしくエッメラにささやいた。これを聞いて、父がほほ笑んだとのことである。それに関連する写真がある。天下を支える伝説上の動物である玄武のことを知ったのは、ずっと後のことであったが……

獅子に乗ったメヒテルト



1927 年 5 月 15 日　玄武と灯籠

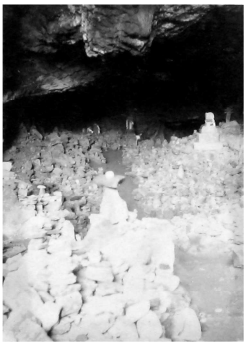
須衛都久神社

死者への祈り

弟のゴットフリートが生後一週間で亡くなった。母の嘆きを目の当たりにした。加賀の潜戸とは亡き弟の縁で父と訊ねたことがある。父の亡き子への祈りをみた。近くの小児科浅野医師の治療の甲斐がなく、ひどい皮膚炎を患い、肺炎（?）が原因で、生後七日で昇天した。父が加賀の潜戸に足を運び小石を積み上げていたことをメヒテルトから聞いている。

袖師ヶ浦の地蔵

生後 7 日で昇天した
長男ゴットフリート



加賀潜戸賽の河原
幼な子の霊の洞窟

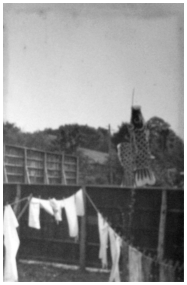
子供の祭

ひな祭りと端午の節句は子どもにとって印象深いものがあった。極めて日本的な彼女の心情が表れているその時の写真が残っている。風が送る空気を大きく孕んで泳ぐ姿は日本独特の生命観を表している。

父フリッツが神話と童話の絵本をすべて揃えてくれた。講談社の絵本は全巻を父が揃えてくれた。自分の手でアメリカの自宅にずっと保存していた。人の道を示す、当時の《修身》の本も手にした。フリッツは神話の絵本も買って

雛祭り　官舎の一室の飾り

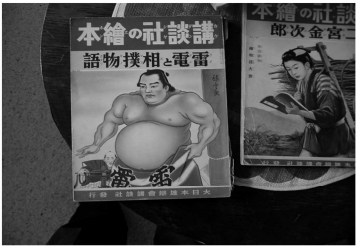
雛祭りの頃　官舎にて

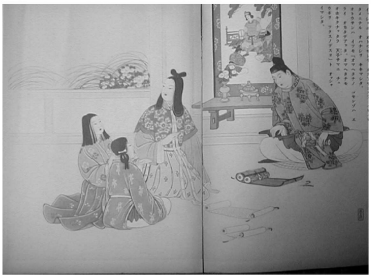


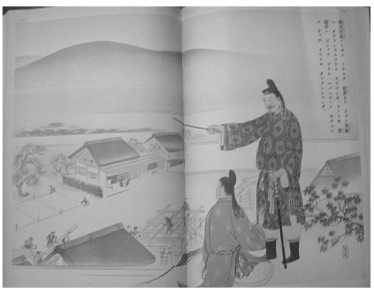
官舎からみた鯉のぼり
鯉のぼりための準備

くれた。これらの絵本からは、この地方の壮大な神話を父からも聞き覚えていたし、国引きの決まり文句「国来、国来」をそらんじていた。

絵本の裏表紙の「なまえ」の欄には自筆で「メヒテルト」と書いて、自分の所有を主張した。それほど絵本を大事にしていた。家庭教師の日本語の授業はいやだったが、これは自分で一人で勉強できるし、いろいろ想像できる。戦時中に失った絵本は、戦後アメリカから新しく講談社に頼んで購入した。それほど思い出深い、大事な本であった。







絵本と日本古代史の逸話

絵本で知った地元の力士の雷電は彼女の興味であったようだ。昭和十四年帰国直前には双葉山が安芸の海に連勝記録を破られたことで、世の中が騒がしかったことを覚えている。

絵本にあった山の手から、米を炊ぐ民の生活を見ての仁徳天皇の行動は、成長してからなるほどと思ったメヒテルトであった。

とにかく美しい人情味あふれた題材が盛り込まれた絵本であった。日本人の心根を映した物語であったと《隣家の火事》のことと併せて筆者にしみじみと語ってくれた。

軽井沢

軽井沢では、別の暮らしがあった。大通りの珍しい写真が残っている。舗装もない通りであった。ここには時々、有澤夫妻が訪ねてきた。

来日後まもなく一四六三番にシンチンゲル家と一緒に住んだ別荘がある。メヒテルトには明確な知識はない。翌年から一九三九年までマンペイホテルに近い、幸福の谷（Happy Valley）の別荘を利用していた。

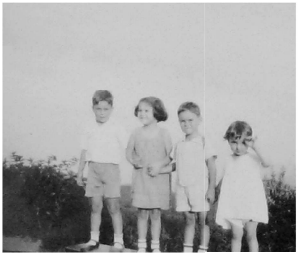
有澤夫人 カルシュ一家と
有澤郷一博士

《フン族の小さな森》

をみんなで手を携えて小鳥とともに歩いた。溶岩流の跡には、ベラルーシから亡命していたピアノ教師のマルゾフ夫人も同行した。世の政情不安にあっても、この地ではまだ平和な空気を満喫できた。

軽井沢はドイツ人で一杯であった。山の好きな父とこの

1927 年 8 月　軽井沢駅前の様子



近所の友達とともに
左から２番目がメヒテルト

ピアノ教師のベラルーシ人の
マルゾフ夫人とともに

半田山の別荘でのひととき

あたりをいろいろと歩き廻った。でも、やはり、浅間山がもっとも印象に残っている。「鬼の舌震い」を笑いながら筆者に説明してくれた。

高校生とともに

高校生は学園祭には手を引いて近所の子供たちを松江高校の庭に招いた。カルシュは生徒を何度か官舎の自宅に招いた。家では自ら家庭料理を披露したり、ドイツ人の若者を同時に招いたこともあった。このことは、メヒテルトの印象にも深く刻まれている。このエピソードは『四ツ手網の記憶』でも述べてある。

官舎の門の前で

学園祭での子供たち

愛犬と戯れるメヒテルト

愛犬と戯れるメヒテルトが印象的である。ともかく動物好きであった。

自転車でよく田園の周囲を走り廻った。楽しいひとときであった。

一九三九年官舎の裏の高橋教授宅で高校関係者の妻や娘による歓送会の記念に写真撮影した。

メヒテルト自転車で近所の探索

1939 年春 高校関係者の妻女とのお別れパーティ

ドイツでの生活

一九三九年春、松江駅でみんなとお別れの挨拶をした。このとき、中林佳子は母とともに一松人形を贈った。このとき、新任のシュヴァルベ夫妻も見送りに来て、竹内紀代子の新調の和服をおねだりした話がある。平成三十年秋に彼らの孫娘らが松江を訪問した。

1939年3月　松江駅での見送り

一九三九年三月十日松江から出立し、途中、神戸六甲の有澤氏の大きな家に一週間ほど滞在した。有澤の家の前で旅立ちの直前に撮った記念撮影が残っている。カルシュ一行は、神戸からサンフランシスコへの船旅であった。サンフランシスコからは汽車で途中カナダを経由し、ロッキー山脈を経てシカゴに着いた。この地にある伯母フリーデルの親しいドイツ人のハナ・フーン宅に一家全員が宿泊した。この時期にバイニング夫人の友人でゲルツ元スウェーデン大使夫人と再会した。

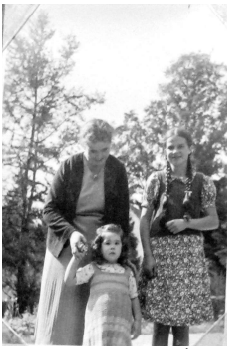
因みに、有澤はフライブルクでテオドール・アクセンフェルト教授の指導を受けた学生であった。

1939年3月 帰国前 神戸の有澤家にて

船名がブレーメンなる船でアメリカからドイツのブレーメンに渡り、そこからはベルリンを経てドレスデンへの旅路を選び、そして祖母のルイーゼを再び訪問した。

ドイツでは、しばらくは妻の故郷近くに滞在していた。一九三九年にバードシャヘン(Badschachen)の一隅に保養のための小さなアパートをベルタ・ホイザー(Berta Heyser)が借りていたので、メヒテルトはここで三ヶ月間過ごした。ルイーゼ叔母の夫のフリッツ・ヘッテは学校の教師で、ドロスイッヒの学寮(インターナート Internat)に住んでいた。彼の務めるこの地の学校にメヒテルトを臨時に三ヶ月間通わせることになった。

エッメラ、フリーデルン、祖母ルイーゼ、メヒテルト、フリッツ



エッメラ、フリーデルン、メヒテルト

1939 年 5 月から秋まで、 リンダウでのメヒテルトとフリッツ

因みに、筆者がドイツで学んでいた時期に、フォルクスワーゲン社の提供した医学生のためのインターナートに住んでいたことがある。

しかし、カルシュに間もなくベルリンからの召集がきた。そして、第一次大戦に従事したことのある予備兵のカルシュに日本赴任の辞令が下った。日本をよく知るカルシュが駐日オット大使の推薦で、思想的にも安全な日本への赴任を勧められたからであった。メヒテルトが父の日本赴任の話を聞いて、飛び上がって喜んで、頭をドアにぶっつけた。早速、皆で日本へ行く用意をした。とても、華やいだ気持ちになった。

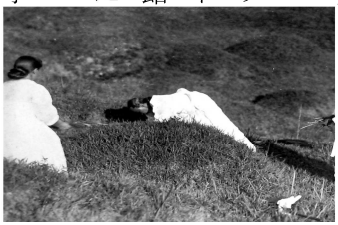
再び日本へ

この時期にはシベリア経由後、満州を経路に日本に入るために、しばし新京（長春）に滞在した。青い目の少女が日本語を話すのを日本兵が見て、いぶかしく思ったらしい。しかし、わざとふざけてみたりして仲良しになれたとの思い出がある。

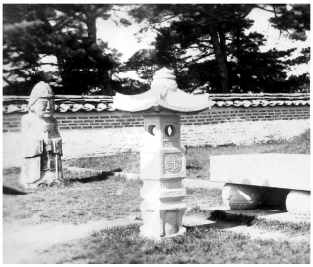
満州から朝鮮を経ての帰路に思い出がある。朝鮮での訪問場所は、古墳の様子からみて伽耶地方であろうが、そのそばで葬式に臨んでいた端正な朝鮮婦人の印象が強かった。

神戸経由で横浜についた。神戸とは同じ港町であったが様相はかなり異なっていた。この地では、宗教関係者とのお付き合いが多かった。着任にあたって横浜山手町にアメリカ人のフレージャーから住居を借用した。横浜での生活は松江での田園生活とは全く異っていた。

フリッツは毎日、ドイツ大使館に通勤したそこでは、東条内閣時代の軍司令部の高官とも職務上しばしば接触していたようだ。彼は家族には一切その話をしなかったが、東京―ベルリン間の通信の暗号化とその解読を行っていたようだ。すなわち、軍事的諜報活動が任務であった。メヒテルトは当時の写真を幾つか保存していた。すべては枢軸国の間の出来事で、



朝鮮貴人の墳墓　昭和 15 年



朝鮮の墳墓　昭和 15 年

朝鮮婦人　昭和 15 年

もちろん家族はだれもそれに関与することはできなかった。

横浜には一九四〇（昭和十五）年春から一九四四（昭和十九）年九月まで居住した。メヒテルト自身はこの間、当時横浜にあったドイツ学園に通わせてもらい、ここで初めて教育らしき公的扱いを受けた。ここドイツ学園での生活はほんの短いものであった。筆者も一九六九（昭和四十四）年から一年間、大森に移ったその後身の東京ドイツ学園で日本人のための夕方コース（Abendkurs）でドイツ語を学習した。この学校は現在は再び横浜に移されている。

横浜　山手町のカルシュの住居

横浜の借家は一九四五（昭和二十）年春の大空襲で破壊された。後に帝京大学でドイツ語の教鞭をとった暉峻（てるおか）凌三がカルシュの噂を聞いて大使館を訪ねてきた。以前から何かと付き合いがあったフリッツのかつての生徒であった十三期文乙の暉峻凌三の斡旋で東京世田谷成城に大きな家を借用した。この頃はここに住んで、すでに半年

横浜　山手町のカルシュの住居

近くになっていた。

ところで暉峻の家族はベルリンに住んだこともあったという。暉峻家は凌三のこともあって、カルシュ家と深い親交があって、ベルリンが降伏した時の暉峻夫人の逸話は『湖畔の夕映え』の初版二刷りに述べたとおりである。暉峻の母が、ドイツ敗戦の時にカルシュ家を訪ねてきた。そのとき、ベルリンのライラックを話題にした。因みに、このときのカルシュの住居は鮎澤 巌の所有であった。彼は、ハーバード、コロンビア両大学で社会学と国際労働法を学び、一九三三（昭和八）年まではＩＬＯ本部の職員として、約十五年間勤務、その間ＩＬＯ東京支局長を務めた。英語に堪能な知米人で平和主義者であったので、戦後はＧＨＱに重用され、占領期の対日労働政策の立案と施行に重要な役割を果たした。

戦争前後

父フリッツは家ではいつも無口で、書斎で考え事をしていた。

戦時中は大使館で日本の要人や軍人との会話が多かった。対話は通訳を介して何度も行ったという。詳細は

1945年10月から1947年8月
14日までのカルシュ一家の住居

家族には知る由もなかった。この頃、彼の滞在を人づてに聞いていたカルシュの愛弟子は、後に〈カルシュの軍服姿は目にしたくなかった〉と言っていた。

ドイツ敗戦前に軽井沢の一三二八番の古い三階の住居に移住していたカルシュ一家の近くには、ドイツ人イーデスと結婚した東郷茂徳外相も再任まで一時的に滞在していた。そこでカルシュと交わした会話は英語ではあったがメヒテルトが記憶している。飼い犬を通じて友達になった年上の娘の東郷イセと親しく遊んだことを今も思い出す。メヒテルトの家族はドイツの降伏後は一九四七年の強制送還までここに住むことになった。しかし、それまでメヒテルトは一家のすべてを支えなければならなかった

父母との別れ

とくに家計を支える役目はメヒテルトにあった。東京のシティバンクで働いた。そこで、ホルトンと出会った。極東軍事裁判では三カ国語の通訳を務めた。自分たちをこのような境遇に追い込んだドイツの国籍を捨てて、アメリカの国籍を取得した。メヒテルトはそれまでに交際のあったアメリカ将

メヒテルトとホルトン
1947 年　東京にて

校ホルトンとの結婚を選び、アメリカに希望をもって渡航した。ロッキー山麓を通過した。その後ゲルツ元スウェーデン大使夫人の紹介でバイニング夫人と出会った。その時に、貴重な今上天皇の皇太子時代の写真を特別に戴いたということである。フロリダでの新婚生活はホルトンとの性格の不一致が原因で終止符を打った。そして、ドイツ語を話すヘルベルト・セイント・ゴアールと出会って一九五四年に再婚した。

この間、成長した妹フリーデルンはマールブルク大学で勉学に励んだ。経済的に苦しかったが、大学の教授の計らいで奨学生として学ぶことができた。卒業後はシュタイナー教育者としての活動を自由ヴァルドルフ学校で行い、退職後もシュタイナー教育の活動を続けていた。そして、この妹を通して筆者との運命の出会いがあった。これについては前述した。

夫ヘルベルト

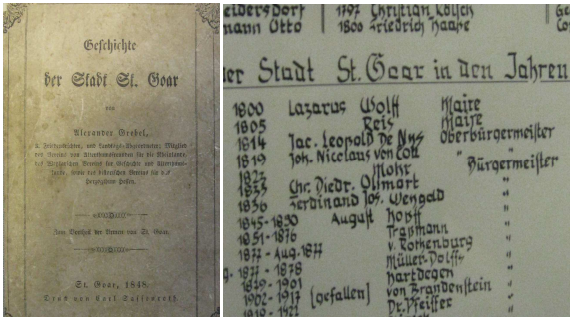
ヘルベルト・ザンクト・ゴアールはハンブルク生まれの旧貴族であった。両親の名前は聞いていないが、ユダヤ人と聞いている。ナチスに父は収容所で殺害された。追われて一九三八（昭和十三）年に母とともに一幅の絵をもってアメリカに亡命した。この絵はチャタヌーガの自宅の居間に掲げてある。ヘルベルトは戦時中、米兵としてバルジ作戦に参戦した。彼

はドイツ語が母国語なので大きな役割をもって戦後処理に従事した。ミュンヘンでハンス・バウアーより押収した十六巻の十六ミリフィルムは、現在ベルリンの博物館に重要資料として厳重に保管してある。そのうち四巻を秘匿し、長く自宅に保管していたが、世紀末にシュピーゲル社に譲渡した。現在は、そのすべてが前述の博物館に保存されている。

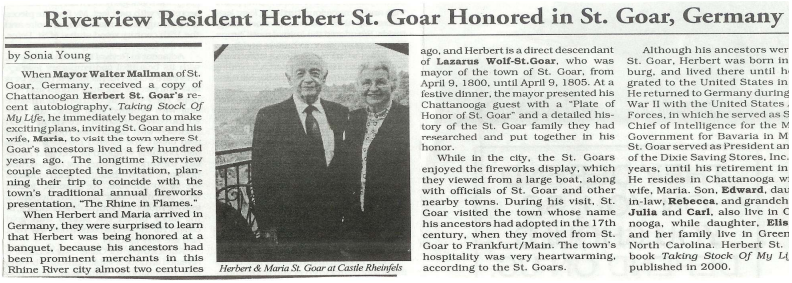
先祖はライン河畔のザンクト・ゴアール

バルジ作戦前のヘルベルト

セイント ゴアール夫妻 ヘルベルトの両親 父はハンブルクでナチにより殺害, 母はヘルベルトとともにアメリカに亡命した。



博物館として使われているライン河畔の古塔にあった書類の一部-



Riverview Resident Herbert St. Goar Honored in St. Goar, Germany

by Sonia Young

When **Mayor Walter Mallman** of St. Goar, Germany, received a copy of Chattanoogan **Herbert St. Goar's** recent autobiography, *Taking Stock Of My Life*, he immediately began to make exciting plans, inviting St. Goar and his wife, **Maria**, to visit the town where St. Goar's ancestors lived a few hundred years ago. The longtime Riverview couple accepted the invitation, planning their trip to coincide with the town's traditional annual fireworks presentation, "The Rhine in Flames."

When Herbert and Maria arrived in Germany, they were surprised to learn that Herbert was being honored at a banquet, because his ancestors had been prominent merchants in this Rhine River city almost two centuries ago, and Herbert is a direct descendant of **Lazarus Wolf-St.Goar**, who was mayor of the town of St. Goar, from April 9, 1800, until April 9, 1805. At a festive dinner, the mayor presented his Chattanooga guest with a "Plate of Honor of St. Goar" and a detailed history of the St. Goar family they had researched and put together in his honor.

Herbert & Maria St. Goar at Castle Rheinfels

While in the city, the St. Goars enjoyed the fireworks display, which they viewed from a large boat, along with officials of St. Goar and other nearby towns. During his visit, St. Goar visited the town whose name his ancestors had adopted in the 17th century, when they moved from St. Goar to Frankfurt/Main. The town's hospitality was very heartwarming, according to the St. Goars.

Although his ancestors wer St. Goar, Herbert was born in burg, and lived there until h grated to the United States in He returned to Germany during War II with the United States Forces, in which he served as S Chief of Intelligence for the M Government for Bavaria in M St. Goar served as President an of the Dixie Saving Stores, Inc. years, until his retirement in He resides in Chattanooga w wife, Maria. Son, **Edward**, dau in-law, **Rebecca**, and grandch **Julia** and **Carl**, also live in C nooga, while daughter, **Elis** and her family live in Green North Carolina. Herbert St. book *Taking Stock Of My Li* published in 2000.

メヒテルトが夫ヘルベルトの父祖の地のライン河畔のセイント・ゴアール市を訪問した折の歓迎の新聞報道。父祖は約 200 年前の市長を務めた富豪。ヒトラーのフィルム公開と自伝出版を期にドイツ側が調査を行った結果である。

城主であったし、約二〇〇年前の城主のラツァルスはこの都市の市長であった。

その証拠をライン河畔の古い塔内の簡易博物館で筆者が留学生時代の友人のレードレル博士とともに確認し、写真撮影した。

同博士はヒトラーの私的パイロットであったハンス・バウアーを医師として診察したことがあるとのことである。筆者がチャタヌーガのメヒテルトの自宅を二〇〇四年に訪問した時、カルシュと日本との因縁、それを超えた日本との深い因縁を夫の

自分が出演しているテレビ録画の様子を見ている
ヘルベルト チャタヌーガの自宅にて 2002 年 4 月

ヘルベルトに細やかに説明してくれたことがあった。

すると、しばらくして、戦後に彼の関わった重要資料に基づいたドキュメントについて、彼自らが説明してくれた。そのビデオを自ら眺め、筆者に解説したときの写真である。

日本との絆

一九六八年（昭和四十三）年増田義哉らの発案から田村清三郎らが中心になって同窓会が募金を呼びかけ、カルシュ氏の日本への招待を実現した。十月五日に一畑ホテルでＮＨＫ松

旧生徒からの贈り物　1968 年 10 月

お気に入りのミニチュアの内部

NHK ラジオインタビュー　フリッツとメヒテルト 松原の顔が見える.
1968 年 10 月 5 日

江放送局にインタビューを受けた時のカルシュ本人の声が磁気テープに残っている。日本語でのインタビューである。錦織君枝、中村（石飛）フデ子、松原武夫旧制松江高校の元教授、メヒテルト、ヘルベルトの声もアナウンサーの声とともに聞くことができる。

ところで、メヒテルトは旧制松江高校での講演会では通訳を務めたり、自分自身は旧友とも会い、思い出の場所を訪れた。昔話に花を咲かせた。アメリカへの帰りがけには、日本の家屋のミニチュアをプレゼントされた。内部の様子は写真のよ

東京国際空港到着の折 1968 年 9 月 26 日
後列 左から赤川ツネコ、?? 赤川妹、長屋喜一 前列 左からメヒテルト、ヘルベルト

奥野、白石らの新大阪駅での見送り

カルシュの右隣が久留米大学および福岡大学元教授の増田義哉（6 期理乙生）

うである。かつて松江城から自ら撮影した美しいパノラマ写真を名古屋で医師としてカルシュにささげたことをメヒテルトに語った。

ところで、単独での訪問時を振り返って、愛弟子の馬場長夫からもらった羽子板を思い出しながら、また写真のミニチュアを大事に自宅で保存しながら日本を自身が懐かしんでいることを併せて語っていた。

カッセル盲人施設でのカルシュ講演の録音の一部（1969年4月）メヒテルトより入手

話題は逸れるが、カルシュはカッセルの盲人施設での講演やドイツの有力な人々、日本の著名な人々との交流があった。このファイルはデジタル化して、保存してある。メヒテルトの肉声とともに一部は公開してある。カッセルでの家族マールブルクにて写真は家族がそろったところをヘルベルトが撮影したものである。このころは、生活も厳しさから安定期に入った時期である。フリッツとともに松江に招待されてからほぼ二十年の後には、松江時代の縁の人々と会うために日本を訪れた。東京をはじめ松江での旧き友との再会に重点を置いた訪問であ

家族とともに　マールブルクにて

った。そこでは酒井、田島や増田、竹原、奥野、白石らの歓待を受け、かつての愛弟子とともに、カルシュの業績を思い出し、日本を後にした。これがメヒテルトにとって、最後になった大好きな生まれ故郷の日本訪問であった。

米国の家族

エドワード レベッカと二人の孫とともに
エドワードの自宅で

アトランタの近くの町にあるチャタヌーガの彼女の自宅内と街中での撮影写真がある。ヘルベルトが案内してくれたし、帰りには空港にも送ってくれた。メヒテルトは数学の得意な孫娘が自慢であった。筆者と九歳違いの長男のエドワードはテネシー河のほとりにある閑静な家に住んでいる。筆者とフリーデルンは九歳

チャタヌーガの自宅と居間で愛猫ミーツ戯れるメヒテルト

違い。さらに彼女とメヒテルトが九歳違い、そして筆者の母と九歳違い。筆者がフリーデルンと出会ったのが一九九九年九月であった。「九の連鎖」が不思議な縁を語る運命か偶然か解らない我々の出会いであった。

父の跡を

アメリカでは、メヒテルト夫妻は最初は生活に手一杯であった。徐々に生活を取り戻した夫妻は家を手にした。人並みの生活であった。その間、人々との出会いがあって、父母から受けたかつての人智学を想い、仲間と語り合った。その頃、妹がドイツのマールブルク大学卒業後に自由ヴァルドルフ学校で教員になったこともあって、メヒテルト自らはシュタイナーや**人智学関**連の著書と翻訳を手掛けた。参考までに死に至るまでに残した彼女の著書と翻訳を付録に掲げておく。

あとがき

メヒテルトについては、彼女の生涯を小生が知っていることだけでもいつか遺して置こうと思っていた。しかし、その機会がなかなか得られず、この期に至って、筆者のドイツ滞在中と米国滞在中の彼女との対話、それに電話や書簡から得た断片的知識をもとに彼女の生涯を可能な限り復元してみた。

彼女の死によって、残念ながら、残された写真、書類の意味が解らず復元できなくなった今は、ほとんど新しい知識は得られなくなった。この間、カルシュに関する中傷への反論、筆者にまかされた諸々の写真について、提供者の名前を出さずに使用されたことと併せて、それに伴う拡散の防止に関する苦労があって、時間を浪費しなければならなかったことは返す返す残念なことである。それゆえ、本来だれでもールを遵守して、提供者を明確にして堂々と自由に使える筈の資料に、使用の制限をやむを得ず若干設ける苦しさを味わうことになってしまった。

とくに亡き旧生徒から託された使用制限を遵守することでは、周囲の理解が簡単に得られず、それに関する不満が少なくなかったようである。

調査の中で書き留めることができずにいたが、しかしきっと後々に見出せることを、今後は随時書き加えることにして、ひとまず筆を置くことにしたい。

一九一八年十二月十日　著者

付
録

メヒテルト・マリアの研究者としての業績（翻訳および著書）

1. Genesis: Creation and Patriarchs 1983
   Emil Bock ＆Maria St.Goar Hardcover
2. Health and Illness, Vol2:Lectures to the Workmen 1983
   Rudolf Steiner ＆Maria St.Goar
3. Mankind At the Threshhold – The Apocalyptic Language of This Century 1983
   Johannes Tautz ＆Maria St.Goar
4. The Origins of Natural Science(CW326) 1985
   Rudolf Steiner ＆Maria St.Goar
5. The Time-Sequence and Spiritual Foundations of Threefoldings- 1998
   Rudolf Steiner ＆Maria St.Goar
6. Time of Decision 2000
   Friedrich Hiebel ＆Maria St.Goar
7. Education as Preventive Medicine : A Salutgenic Approach (German Edition) 2002
   Michaela Glockler ＆Maria St.Goar Paperback
8. The foundation Stone Mediation: A key to the Christian Mysteries 2006
   Sergei O. Prokofieff ＆ Maria St.Goar
9. Sait Paul: Kife, Epistles and Teaching 2006
   Emil Bock ＆Maria St.Goar
10. Anthroposophy and the Philosophy of Freedom:
    - Anthroposophy and its Method of Cognition- 2009
    Maria St.Goar
11. The Guardian of the Threshold and Philosophy of Freedom:
    On the Relationship of Thephylosophy of Freedom to the Fifth Gospel 2011
    Sergey Prokfiev ＆Maria St.Goar
12. Moses: From the Mysteries of Egypt to the Judges of Israel 2011
    Emil Bock ＆Maria St.Goar
13. Why Become a Member of the School of Spiritual Sciences (Paperback) 2013
    Sergei O. Prokofieff ＆Maria St.Goar

参考文献

一 若松秀俊「忘れられた異人さん」多くの若者を育んだフリッツ・カルシュ
松江での日々と日本への想い(私家版 二〇〇〇年十二月)
二 若松秀俊「想い出の中の旧制高校」私達はカルシュ先生の生徒でした（私家版二〇〇一年一月）
三 日独協会機関誌「かけ橋 Die Brücke」カルシュ一家が住んでいた官舎
Die ehemalige Wohnung der Familie Karsch. 二〇〇一年五月号 表紙
四 日独協会機関誌「かけ橋 Die Brücke」日独文化交流を 支えた人々 第一回 旧制松江高等学校教官
フリッツ・カルシュ博士 Förderer des japanisch-deutschen Kulturaustausches (1) Lektor an der Matsue
Kotogakko. Dr.Phil. Fritz Karsch (1893-1971) 二〇〇一年九月号七―八頁
五 若松秀俊「湖畔の夕映え カルシュ博士と松江」文芸社 （二〇〇二年六月）
六 若松秀俊「第二のラフカディオ・ハーン」 致知 二〇〇二年九月号 八十七―八十八頁。
七 H.Wakamatsu Brückenbauer Pioniere des japanisch-deutschen Kulturaustausches 158-163 Japanisch-Deutsches Zentrum
Berlin Japanisch-Deutsche Gesellschaft. Jaanisch-Deutsch Gesellschaft Tokyo (2005)
八 若松秀俊「忘れ得ぬ偉人」カルシュ博士と松江 マツモト（二〇〇七年二月）
九 若松秀俊 「四ツ手網の記憶」 松江を愛したフリッツ・カルシュ ワン・ライン（二〇〇七年七月）
十 若松秀俊「縁の環」財形福祉協会（二〇一二年二月）
十一 若松秀俊「朝霧の瀬」財形福祉協会（二〇一二年二月）
十二 カルシュの教育の原点を探る（一―八）インターネット新聞二〇一〇年六月十六日―八月二十三日
十三 カルシュの見た出雲地方（一―十九）インターネット新聞二〇一〇年六月二十五日―八月十二日
十四 カルシュの見た日本各地（一―二十四）二〇一〇年 インターネット新聞十一月一日―十二月二十九日
十五 H.Wakamatsu: Erinnerungen aus dem Viereckigen Tauchnetz-Japanische Schoenheit, gesehen durch blaue
Augen- Fritz Karsch und seine Liebe zu Japan. Matsumoto(March 2016)
十六 「新版 四ツ手網の記憶」若松秀俊 ワンライン 二〇一七年一月

情報入手源としては、同窓会関係資料などを参考にした。また、すべての写真や図は、メヒテルトから、また旧制松江

高等学校の生徒から、また筆者自身の撮影によるものである。したがって、使用する場合は、その旨を記述することをお願いする。

追悼文

メヒテルト マリア （カルシュ） セイント・ゴアール

二〇一八年八月十五日に自宅から旅立ちました。享年九〇歳

謹んで哀悼の意を表します。

故人の名前はMechtild Maria St. Goar (Karsch)です。自宅の住所はアメリカ合衆国・テネシー州 チャタヌーガ・ヒクソン・パイク通りです。彼女の和名は星子です。アメリカ人がメヒテルトと発音できず、メクティルトと呼ぶのが嫌で、彼女は戦後にミドルネームのマリアを名乗り、戦後の混乱時にあっては、ドイツ国籍を取得せず、アメリカ国籍になりました。再婚した夫ヘルベルトセイント ゴアールはユダヤ系ドイツ人でしたが、アメリカ国籍を取得しました。

しかし、もともとドイツ人であった夫妻が自らの子供たちにドイツ語を教えなかったことだけは、思い残す例外的な失敗でしたと小生に洩らしていました。他には、数多くの生活体験をすることができて、言葉にも不十自由することなく、この世には思い残すことはなく、人智学を胸に何時でも天に昇れると生前に言っていました。それにしても、小生との出会いは妹と出会いを通してでしたが、すべては父カルシュとの因縁としか思えない不思議なこととして繰り返し語っていました。

メヒテルトの父はドイツ人で、母エッメラはユダヤ人です。　松江生まれ、松江育ちのメヒテルトは子供の頃は周囲からメヒテちゃん、妹はフリーちゃんとよばれていました。

毎年、夏季にはドイツ人の居住区の軽井沢の別荘で過ごしました。戦中は、東郷茂徳外相の娘のイセと親交がありました。ここでは、当時の白ロシア（現ベラルーシ）から亡命してきたマルゾフ夫人との親交も記録されています。戦後には、彼女はシティバンクで働き、在日アメリカ軍属のホルトンと結婚しました。当時、両親はメヒテルトを単身で日本に放置することを望まなかったので、メヒテルトに結婚を勧め、自らはフリーデルンを連れてドイツに帰国しました。

当時、日独米の3カ国のすべてに関係のあったメヒテルトは、極東軍事裁判で3カ国語の通訳を務めました。そして、アメリカで離婚後にヘルベルトと再婚し、エドワードとエリザベートを授かりました。

最近の五，六年は自力で歩けなくなってはいましたが、人智学関連のドイツ語-英語の翻訳は継続していました。食事は必ず、近くの息子と欠かさず摂っていましたが、体力は次第に衰え、死因は聞いていませんが、推定するに老衰と思われます。

カルシュ博士は松江にとって大事な人であり、メヒテルトはカルシュ博士の最大の理解者で、多感な時代を松江で過ごしました、それこそ、人々との交流を通して日本を心より愛し、深く理解した人の所以です。

拙著『四ツ手網の記憶』の記述のために、カルシュの旧生徒とともに、父の業績を飾ることなく、ありのままに語ってくれました。日本語の読みが困難になっていた、彼女の自宅を訪問した時期には、拙著の小生による読み上げを微笑みながら聞いてくれ、その時にも新たな深い思い出を付け加えてくれました。

ハンブルグで貴族の身分であった、彼女の夫ヘルベルトについて言及しますと、彼は戦中ナチスの迫害にあって、父の虐殺の後に実母とアメリカに亡命しました。戦時中は米兵としてヨーロッパのバルジ作戦に参

戦しました。戦後処理では、ヒトラーの専属パイロットであって、同時にプロの写真家であったハンス・バウアーを自ら直接尋問して、ヒトラーの行動に関する重要な十六ミリカラーフィルム十六巻を押収したその人です。バウアーが花壇の下に隠匿していたフィルムは現在、ベルリンの博物館に厳重管理されています。小生が一九七三-一九七五年に留学していたエルランゲン・ニュルンベルグ大学でともに学んだペーター・レードレル教授(内科学)が偶然にバウアーを診察した経緯と因縁があります。ヘルベルトの約二百年前の祖先のラツァルスはライン河の景勝地のザンクト・ゴアールに居城をもち、市長を務めた富豪でした。これらのことがドイツで明らかになるとセイント・ゴアール夫妻は町を挙げての花火大会の中で歓迎されました。小生は、ライン河の流域にある先祖の居城の一角の小さな博物館で、フランス語で書かれた当時の書類を閲覧することができました。

カルシュは教育者、哲学者として自身の著書・論文および未発表の原稿を残しております。その良き理解者で思想を体現したのは娘のメヒテルトとフリーデルンでした。メヒテルトの母エッメラには、眼科学で著名な医学者とショパンコンクール入賞者で日本の音楽家との関係が深いピアニストのエディトの父娘がおります。

改めて小生に微笑みかける故人との縁（えにし）の深さを思いながら、ひたすら冥福を祈っています。

本名のメヒティルト、セイント ゴアール、エッメラ は、これまでの拙著および新聞など、ほぼすべてにわたって、日本人の耳に馴染む メヒテルト、セイント ゴア、エンメラ と表記しました。因みに、彼女自身はいつもメヒテルトと表記し、これを正式な名としてきました。

メヒテルトには日独米にわたって、公的な正式な学歴がなく、僅かに一九四〇年頃、ドイツ学園に通った経歴のみです。そして、すべてを両親の教えと独学の結果として自ら学者になった人です。

若松秀俊筆

著者略歴

若松　秀俊　一九四六年福島県生。一九七二年横浜国立大工学系大学院修了後、東京医科歯科大医用器材研究所助手、足利工大助教授、福井大工学部教授を経て、一九九二年より東京医科歯科大医学部教授、同大学大学院教授、二〇一二年より東京医科歯科大名誉教授。その間、沖縄県立看護大学大学院・文京学院大学非常勤講師。専門は生体機能支援システム工学。一九七三年～七五年ドイツ学術交流会奨学生としてエルランゲン・ニュルンベルク大学医学部バイオサイバネティクス研究所研究員、米国オレゴン州立大学、中国首都医科大学、南京航空航天大学、韓国釜山国立大学などの客員教授・研究員兼任。工学博士（東京大学）。

専門著書に「医用電子と生体情報」「医用工学」「救急医療のための機器システム」「新しい大学院教育を探る」「ナースのための遠隔情報管理システム」「バーチャルリアリティにおける力覚表示とその応用」など。

専門外のライフワークとして、教育界の偉人であるカルシュ博士についての著書「忘れ得ぬ偉人」「湖畔の夕映え」「四ツ手網の記憶」「縁の環」「朝霧の瀬」、「Erinnerungen aus dem Viereckigen Tauchnetz」「新版 四ツ手網の記憶」がある。また歴史小説に「王家の祠（日本語版および韓国語版）」「大海の都邑」「祀られた昔日」「古代の移り香」「夢路の倭の影」がある。

備考　島根大学所蔵の日本語で書かれた書類を見たある人からカルシュのファーストネームが Herman であると誤って主張されたことがある。しかし、Fritz が正しい。フルネームが Fritz Herman Karsch で、その父が Herman Friedrich Karsch であることを正式に述べる。なお母方の祖先は未婚で子をもうけた貴族の Elizabeth である。彼女の孫 Margaritta von Tuelingen が後に出家し、St. Elizabeth となり、後に祖母の名前に因んでマールブルクにエリザベート教会を創立したと伝えられる（未確認情報）。

メヒテルト・マリア

星の輝き・その生きざま

2019 年　3 月 17 日　初 版

著　　者 …… 若松 秀俊

発 行 者 …… カルシュ博士研究会

千葉県我孫子市我孫子 4-40-2 7

印刷・製本…株式会社マツモト

福岡県北九州市門司区社ノ木 1-2-1